

ISAPH

アイサップ
ニュースレター

第16号

News Letter

2013年10月5日発行



写真：マラウイ 活動地区の子どもたち



ISAPHはラオスとマラウイの母親と
子どもたちの保健の向上を支援しています

NPO International Support and Partnership for Health



マラウイからの報告

マラウイの農村で見た 住民の健康づくりへの取り組み

(財)江戸川区医師会臨床検査センター

管理医師 松葉 剛

今年5月から始まったマラウイの「子どもにやさしい地域保健プロジェクト」の視察を目的に8月10日から10日間の日程でマラウイのプロジェクトサイトであるムジンバを訪れてきました。成田から香港で乗り継ぎ南アのヨハネスブルクまで20時間。そこから更に2時間半でマラウイの首都リロングウェに到着します。ムジンバはそこから北へ250キロ。舗装された道路が一直線にアフリカの大地の上に敷かれ、リロングウェからわずか3時間弱で到着しました。

私の視察の目的は統計・疫学の専門家としての立場から、プロジェクト開始時期における初期調査の進展具合や問題となる点がないかどうかを調べることでした。このプロジェクトでは統計学的または疫学的手法を用いて、プロジェクトの中間評価や最終評価を行うことにも力を注いでいます。

調査については、現地に長期に滞在される齋藤専門家が現地のスタッフと共同で、既にデータ収集を終えられていました。私もかつて開発途上国でのフィールド調査の経験がありますが、こういった調査を日本で実施する場合に比べ、多くの様々な困難さがあります。調査対象者の人口が分からずランダムサンプリングが困難なこと、調査対象者へのアクセスの悪さ、現地の言語を理解する質問者の不足とトレーニングの必要性、対象者の識字率の低さなどクリアしなければいけない問題がたくさんあります。こういった問題を一つひとつ解決され、調査を実行された齋藤専門家のスキルの高さには脱帽いたしました。単に統計・疫学の知識だけでなく、現地のスタッフとの信頼関係の構築がなければ結果を出すことができない業務だと思います。

それ以外に、フィールドで行われている母子保健活動を視察する機会を得ました。マラウイではプライマリレベルでの保健医療活動の担い手はHSA (Health



お母さんに体を洗ってもらって気持ちよさそうな坊や

Surveillance Assistant) と呼ばれる職員です。彼らの診療や母子保健事業の活動を見学し、数名のHSAとのディスカッションを通じ、彼らの通常業務を実行する上での問題点などについて知ることができました。多くの開発途上国に共通の問題ですが、ここでもプライマリレベルで活動する彼らスタッフへの過剰な業務委託や士気の低下などの問題が見られました。人々の健康行動を変えるには、上からの押し付けはあまり効果がなく、住民自らの意思での実践が効果的だと考えられています。HSAによる上からの指導には今の体制では効果の期待が薄いと思われた中、住民による自発的な健康づくりに対する実践例を見ることもできました。

ヘルスセンター近辺の村の粉ひき場を訪れた時、主食のシマの精製に通常の材料のメイズに大豆を加えて挽いているのを見かけました。さっそくこれを行っていた村の主婦に話を聞いたところ「足りない栄養を補うためにやっているのだ」との回答。健康を保持増進したい気持ちはどこの世界へいっても変わりません。きっとこういった住民の自発的な健康づくりへの取り組みや、その芽生えがあるはずと思っていた私は、その場で小躍りしてしまいました。こういった意識や取り組みをサポートし村中に広げていけば、乳児の栄養改善につながるのではと感じました。



主食のシマ。メイズのでんぷんを固めたもの。日本の白米同様、精製する際に栄養を多く含む部分をそぎ落としてしまうので、栄養価的には問題があるといわれている



ヘルスポストで小児を診察するHSA。血性下痢を認めたため、上位機関のヘルスセンターにリファーするための紹介状を記載中

マラウイ「子どもにやさしい 地域保健プロジェクト」の活動開始

ISAPH事務局 齋藤 智子

平成25年4月18日にマラウイ政府と了解覚書(Memorandum of Understanding)を締結し、その後5月30日にJICAとの草の根技術協力事業の契約作業が完了し、プロジェクトが開始しました。

プロジェクト開始にあたり、ベースラインサーベイの対象者の実数を把握するため、人口調査を行いました。人口調査はコアの対象村とする8村の全世帯を訪問し、各世帯の全ての構成員の生年月日、性別、とくに5歳未満児の把握に心掛けました。なお、調査員は村長さんを通して、村人からボランティアを選んでもらいました。村長さんの推薦とはいえ、それぞれ資質は異なり、1回の説明で実施可能な人もいれば、こちらの説明を理解していたように見えたのに多くの記入漏れがあったり、調査用紙の大部分を紛失したりした人もいました。8人中ほぼ問題なく実施できたのが2人だけでした。

10日間の調査実施期間中、地域の情報をほとんど持たないプロジェクトの運転手と私でほぼ毎日ボランティアの実施状況を抜き打ちで訪問し、励ましながら確認・指導を行いました。事前連絡を行わずにボランティアを訪問した理由は、業務量が多いヘルスセンター職員に負担をかけないためでした。夜には携帯電話を持つボランティアとその日の実施数の確認をしました。村には電気がきていませんが、最近太陽電池の普及が進み携帯電話の充電が可能となったため、その保有者が驚くほど多いです。しかし、電波の具合などで同じ村にいても通信不能であったり、実施件数をSMS(Short Message System)で送付してもらっても受信までの時間が長かったり、日本の事情とは大きく異なる現実を経験しました。

現場での頻回な確認作業のおかげで8村の位置や特徴を把握することができ、村長さん、ボランティア、一般の村人とも知り合う機会となりました。また、運転手はブッシュの中の小道を迷うことなく対象村までたどり着くことができるほど、この地域のエキスパートになりました。ムジンバ地区は世帯間がとても離れていて、大きい村では280世帯もあるため、歩く以外に移動手段を持たないボランティアにとって調査は容易ではなかったと思います。この貴重なデータはヘルスセンターとも共有する予定です。

ベースラインサーベイではこの人口調査データから村別の2歳未満児のリストを作成し、これらの子ども

体重測定の様子



たちの割合を参考に無作為に対象者を100人抽出しました。今回は世帯間の距離がとても離れていることから、世帯訪問ではなく村でGrowth Monitoring(子どもの身体計測測定)を実施している拠点(最小の保健施設であるヘルスポストあるいは小学校)に対象の子どものお母さんたちに来てもらうようにしました。その連絡は末端の政府の保健要員であるHSA(Health Surveillance Assistant)と人口調査を担当したボランティアに依頼したところ、当初ちゃんと来てくれるか不安でしたが86%の参加があり、ますますの結果でした。

ベースラインサーベイの質問票はプロジェクト関連のデータをより広く得るため、多岐にわたる内容でボリュームがあります。また、収集するデータはプロジェクト開始時点のベンチマークとなるため重要なものです。調査前に県病院の看護師や衛生保健官、その他看護大学の講師などからなる調査員へのトレーニングと、対象外の村での質問票の模擬テストを行いました。調査は8月上旬に集中的に5日間かけて行い、現在データの集計中です。この結果はまた追って報告いたします。



聞き取り調査の実施風景

エコ活動による社会貢献活動と国際協力シンポジウムを終えて

ISAPH事務局 磯 東一郎

本年7月20日にラオス母子保健プロジェクトのラオス人カウンターパートを招聘し、国際協力シンポジウムを実施しました。シンポジウムのテーマは、「エコ活動による社会貢献活動と国際協力シンポジウム」です。「エコ活動と国際協力って関係あるの?」という疑問を持たれる方も多いと思いますので、ご説明します。皆さんは「iサイクル」をご存知でしょうか。このiサイクルは、「環境に配慮する心と人を思いやる心を養うこと」を目的に、聖マリア病院の職員が中心となり立ち上げた団体です。ペットボトルキャップを収集し、その売却益により国際協力活動を支援しており、私どものラオスの母子保健プロジェクトもその支援を受けています。

iサイクルはキャップ収集活動を通じ環境を大切にする心を養い、その収益金を100%国際協力団体に寄付することで、更に開発途上国での社会貢献につなげています。ISAPHのラオスプロジェクトは、支援を必要とする住民の健康や生活の向上にその資金を100%役立てています。まさにこれは「善意の輪」「愛のサイクル」と呼べるのではないのでしょうか。今回のシンポジウムはこのような視点に立ち以下の目的で実

施致しました。

- ①エコ活動による環境保全の意識の向上
- ②開発途上国の保健医療事情や子どもを取り巻く状況を知り、国際協力への理解を深める
- ③異文化に対する関心を高める

シンポジウムの前半では、iサイクルのエコ活動報告と実際に活動に携わっている関係者の活動発表および、iサイクルから支援を受けているカッサノ修道女会による、フィリピン・ブリハン地区の貧困母子支援活動について報告していただきました。後半では、ラオスの保健医療事情や保健政策、プロジェクトの活動内容や成果、そして農村部の保健医療の課題について、ラオスから来日したラオス国カムアン県保健局副局長のDr. パースック、カムアン県セバンファイ郡副保健局長のDr. サイソムワン、セバンファイ郡長のMr. ブンシィに報告していただき、更にラオスの保健医療の問題・課題について、座長の聖マリア病院国際事業部部長の浦部先生より補足説明をしていただきました。

参加者は78名にのぼり、うち42名から回答いただいたアンケート結果では、満足と回答された方が36名(86%)で「エコ活動に参加した人たちの動機が興味深く、感動した」「現在行われている国際協力内容について知ることができたので有意義な講演だった」「ラオスやフィリピンといった開発途上国について知ることができてよかった」といった感想を多くいただきました。また、シンポジウムの継続開催を希望する声も7名の方からいただきました。その他にも「将来国際協力に携わりたい」「iサイクルの活動を更に広げていきたい」といった国際協力やエコ活動に参加したいという前向きな意見もいただいております。今後も私どもの活動を通じ、一般の方々に国際協力や開発途上国についての理解を深めていただけるような機会を継続的に設けたいと思います。

最後になりましたが、ご支援いただいた公益財団法人俱進会並びに聖マリア病院グループの関係者の皆様、そしてご後援くださった久留米市とJICA九州国際センターに心からお礼を申し上げます。



ラオスの医療事情について講演するDr. パースック(右)と椋プロジェクトマネージャー



会場の様子



ISAPHの活動紹介



ラオスからの報告

ラオス母子保健プロジェクト 健康教育手法研修会の開催

ISAPH ラオス 椋 清美

平成25年6月12日～14日に、カムアン県内の全郡保健局職員（健康教育課・母子保健課）、ヘルスセンター職員、カムワン県保健学校職員を対象とし健康教育手法研修会を開催しました。

健康教育は以前からラオス政府の保健活動の1つとして挙げられていましたが、住民の理解を高めるための創意工夫はあまりされておらず、画一的で効果的なものとは言えませんでした。そのため、当プロジェクトでは郡保健局職員や村の保健ボランティアなどへの健康教育手法の指導や教育用教材作成に力を注ぎ、地域住民へ「理解しやすく、興味を持って、楽しみながら学べる」健康教育を行ってきました。その結果、以前より地域住民の保健医療に関する理解度は増し、栄養や衛生に関する行動変容が見られ始めました。

この研修会は、これまでに得られた成果をISAPH

が支援している地区のみならず、県内の他地域へも普及することを目的として、カムアン県保健局健康教育課と合同で開催されました。ラオスの保健政策にも健康教育（Health Communication）が挙げられており、昨年からの強化が謳われたことも、この研修会実施を後押ししています。

今回の研修内容は理論から実践までを網羅しており、健康教育についての基礎知識やパネルシアター、フリップチャート、ポスターなどの教材の有効利用方法などの講義、そしてグループワークを通じて習得した知識の応用を図り、更には村の住民を対象とした実践さながらの実習を行いました。

研修者23名の内、これまで健康教育手法研修会へ参加したことがある人は、わずか2名でした。普段研修会へ参加する機会がないためか、研修者全員から講義・グループワーク・実習すべてにおいて非常に前向きな姿勢で取り組んでいる様子が見え、質疑応答でも活発な意見交換が行われました。

最終日の村での実習では、指導者からの指摘事項であった「住民へは分かりやすい言葉を使用すること、住民へは敬意を表し健康教育を行うこと、一方的な健康教育にならないように住民を巻き込みながら健康教育を行うこと」などを踏まえ、各グループとも住民との対話を通じコミュニケーションを深めつつ「分かりやすく、楽しく、興味をもてる」健康教育を行うことができていました。今後、研修者たちが今回学んだことを生かした健康教育を担当地区で実践できるようになることを期待しています。

今回の研修会を開催するにあたり、助成金をいただきました株式会社リコー社会貢献クラブFree Willの関係者の皆様に心から感謝申し上げます。



ISAPHによる健康教育教材の指導



熱心にグループワークを行う参加者たち



実習の様子

スタディツアー

平成25年4月～7月の期間に、以下2件のスタディツアーの受け入れを致しました。

- ①東京女子医科大学医学部 4/17～4/19 4名（引率者1名含む）
- ②東邦大学医学部看護学科 7/24～7/27 11名（引率者2名含む）

提出していただいた感想文の中から、一部を抜粋してご紹介致します。

セバンファイ郡病院にて
（東京女子医科大学医学部）



東京女子医科大学医学部6年 穴戸 穂波

モバイルクリニックでは、妊婦さんへの栄養教育や予防接種の様子を見ることができ、ラオスにおける食事タブーの現状や、父親や家族の理解の重要性を理解することができました。各病院の見学では、ISAPHをはじめとする支援機構の寄付によって医療の幅が大きく広がっていることに驚き、手術ができる環境や、家族計画のサポートはラオスにおいてとても大切だと感じました。今後は外国からの支援に頼らずとも、現地スタッフだけで継続が可能な環境が整っていけば良いと思います。

東京女子医科大学医学部6年 石原 千尋

ラオスの郡病院から県病院、首都のリファラル病院まで様々な場所を見学させていただきましたが、そこにある現状を実際に見て、どのようにすればもっと良い医療を提供できるのだろうとその都度考えることができ、勉強になりました。今回は学生実習として参加させていただきましたが、いつかは医療人として再びラオスを訪れる機会があればと思っています。

東京女子医科大学医学部6年 中田 千香子

ISAPHのスタッフの皆さんは、現地の人と同じ言葉を話したり、同じ洋服を着たり、同じ食事をしたり、現地に寄り添いながら一生懸命活動している姿がとても印象的でした。文化や習慣の異なる国で外国人が活動することは難しいと感じますが、このような姿勢が現地の人々と信頼関係を築き、理解を得るためにはとても重要であると強く感じました。

東邦大学医学部看護学科4年 山崎 由佳

特に印象的だったことは、活動がラオスの文化や状況に合わせて行われていたことです。ラオスでは識字率が低いため健康教育では絵を多く使用し、見ただけでも内容がわかるように工夫されていました。また、モバイルクリニックへの参加を促すために健康教育にゲームを取り入れたり、毎回別の人が行ったりして飽きさせない工夫をしていることが分かりました。

東邦大学医学部看護学科4年 久保 千郷

健診を手伝わせていただいているうちに、自然と声かけやアイコンタクトなどができている自分に気がつきました。何より、村人の皆さんの笑顔や優しさが本当に心にしみました。日本のような先進国で暮らしていると忘れてしまいそうな、人間本来の暖かさや人と人とのつながりの大切さを強く感じました。

私はもともと、医療が行き届いていない小さな村などの医療に興味があったこともあり、今後の自分の人生について考えていく上で、今回の経験は大変貴重なものになりました。この経験を忘れずに、自分自身としっかり対話しながら、自分らしく看護師として働いていきたいです。

東邦大学医学部看護学科4年 葛城 萌

今回実際に目にすることはありませんでしたが、健康教育の内容からもモッカオや食物タブーのような習慣が続いていることを知り、ビタミンB1欠乏と地域住民の食習慣とのつながり、食習慣が健康に及ぼす影響など、食習慣や日常習慣に対する介入がこれからも必要なのだなと実感しました。ですが、習慣を変えることは難しく、相手の文化を否定するのではなく理解し、相手にも理解を求め、認識を変え、そうして行動変容に至るまでの経緯は容易くないのだと思いました。

私は異文化での支援の難しさを感じ、私にできることは何か、そのために今の私に足りないものは何かを見つけることができました。



活動地区の村で記念撮影（東邦大学医学部看護学科）

マラウイ赴任のご挨拶

ISAPHマラウイ 岡本 愛

はじめまして。8月20日に「子どもにやさしい地域保健プロジェクト」の業務調整員としてマラウイに赴任しました岡本愛（おかもとあい）と申します。6月まで青年海外協力隊として同じマラウイで活動していました。今回、ISAPHの職員として再びマラウイにいられたことを大変嬉しく思います。

協力隊時代にも感じていたことですが、ここマラウイ特に村の方では食のバラエティに乏しく、毎日同じ食材を同じ味付けで食べています。日本では栄養バランスの良い食事をするには「1日30品目」と言いますがマラウイでは「1日3品目」といった感じです。そのため栄養バランスが悪く、それによる健康被害も多くみられます。特に子どもにはそれが顕著に表れています。村の人たちと力を合わせ栄養改善も含め母子の健康状態を改善すべく活動して参りたいと思います。

町を歩くと「マイ・フレンド！ ムリ・ウリ？（現



活動地区の村の方々と共に

地語で調子はどう？ という意味)」と声をかけてくるマラウィアン。目が合えば初対面でもフレンドリーに挨拶します。そんなところもマラウイが「ウォーム・ハート・オブ・アフリカ」と呼ばれている所以なのだろうと感じます。そんな彼らとの関わりを楽しみながら、マラウイの母子保健の発展のためにコツコツと実績を積み重ねていけるように進めてまいりたいと思います。

今後とも皆様にはご支援をいただけますよう、よろしくお願い致します。簡単ではございますが、赴任のご挨拶とさせていただきます。

平成24年度収支決算報告

項 目	金 額	内 容
前年度繰越金	5,433,404	
収 入	2,077,218	収入合計
収入内訳	779,000	会費など
	737,100	スタディツアー
	300,000	助成金
	261,118	寄付、その他
支 出	2,145,619	支出合計
支出内訳	1,104,887	ラオスプロジェクト
	371,828	スタディツアー
	668,904	管理部門
収支差	-68,401	
24年度末期預金額	5,365,003	

※本年度より、NPO 法人会計基準に則り活動計算書による報告と致します。

平成25年度予算

項 目	金 額	内 容
前年度繰越金	5,365,003	
収 入	18,600,000	
収入内訳	1,200,000	会費など
	14,000,000	マラウイ JICA 草の根事業
	900,000	スタディツアー
	2,000,000	助成金・補助金
	500,000	寄付金など
支 出	18,600,000	
支出内訳	1,500,000	ラオスプロジェクト(寄生虫対策含む)
	15,200,000	マラウイ JICA 草の根事業
	400,000	スタディツアー
	400,000	国際協力シンポジウム開催費
	100,000	予備費
	1,000,000	事務局事業費（国内）
収支差	0	
25年度末期預金額	5,365,003	

アイ

iサイクルより寄付を
いただきました
ISAPH 事務局



平成25年4月～8月までのペットボトルキャップ収益として、iサイクルより48,465円（キャップ969,304個分）の寄付をいただきました。ありがとうございました。

iサイクル オフィシャル・ホームページ
<http://www.st-mary-med.or.jp/icycle/>

最近のできごと

2013年4月～8月

- 4月 ラオスで寄生虫プロジェクトを開始
- 4月17日～19日 東京女子医科大学スタディツアー受け入れ
- 4月18日 「子どもにやさしい地域保健プロジェクト」のMOUをマラウイ政府と締結
- 5月13日～31日 聖マリア病院国際事業部の山崎裕章氏を寄生虫プロジェクト実施のためラオスに派遣
- 5月30日 JICA九州国際センターとマラウイ「子どもにやさしい地域保健プロジェクト」の契約を締結
- 6月 9日～17日 聖マリア病院の帖佐徹氏、ISAPH事務局の磯東一郎が寄生虫プロジェクト計画打ち合わせのためラオスを訪問
- 6月12日～14日 ラオスで健康教育手法研修会を開催
- 6月24日 聖マリア病院国際事業部の山崎裕章氏、ISAPH事務局の齋藤智子を「子どもにやさしい地域保健プロジェクト」実施のためマラウイに派遣
- 7月20日 久留米市にてエコ活動による社会貢献活動と国際協力シンポジウムを聖マリア病院と共同開催
- 7月24日～27日 東邦大学スタディツアー受け入れ
- 8月10日～19日 ISAPH顧問(プロジェクト評価)の松葉剛氏、聖マリア病院国際事業部部長・ISAPH理事の浦部大策氏を「子どもにやさしい地域保健プロジェクト」実施のためマラウイに派遣
- 8月19日 岡本愛氏を「子どもにやさしい地域保健プロジェクト」実施のため調整員としてマラウイに派遣
- 8月22日～25日 群馬大学がラオス事務所を訪問
- 8月25日～28日 東京医科歯科大学・愛媛県立医療技術大学スタディツアー受け入れ
- 8月27日 ラオス寄生虫プロジェクト健康フェア開催



入会と寄付の
お願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会、ご寄付をお待ちしております。

法人会員 年会費：30,000円

一般会員 年会費：3,000円

入会ご希望の方、ご寄付をお願いできる方は、当東京事務所までご連絡いただければ幸いです。

【振込先】

郵便振込 口座名 特定非営利活動法人ISAPH
口座番号 00180-6-279925

特定非営利活動法人ISAPH 東京事務所

〒105-0004

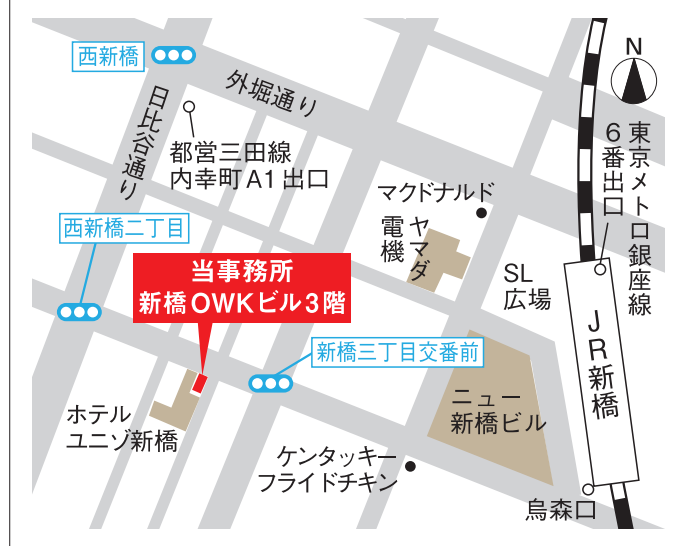
東京都港区新橋3-5-2 新橋OWKビル3階

TEL.03-3593-0188 FAX.03-3593-0165

E-mail tokyojimusho@isaph.jp

URL <http://isaph.jp/>

東京事務所案内図



【ISAPHニュースレター 第16号 編集スタッフ】

石原 潤子／磯 東一郎

ISAPHの役員名簿

役 職	氏 名	備 考
理事長	小早川 隆敏	東京女子医科大学名誉教授
理 事	深見 保正	元福岡県企業管理者
理 事	湯川 武	早稲田大学イスラーム地域研究機構 招聘研究員
理 事	浦部 大策	聖マリア病院国際事業部
理 事	江藤 秀顕	神山復生病院
監 事	竹之下 義弘	弁護士(東京六本木法律特許事務所)

社会医療法人
雪の聖母会



聖マリア病院

理事長：井手義雄 病院長：島 弘志

〒830-8543 福岡県久留米市津福本町422
TEL.0942-35-3322(代) FAX.0942-34-3115
URL <http://www.st-mary-med.or.jp>

- 厚生労働省臨床研修指定病院
- 厚生労働省歯科臨床研修施設
- 厚生労働省臨床修練病院
- A Baby-Friendly-Hospital-Initiative (赤ちゃんにやさしい病院) WHO・ユニセフ指定
- 日本医療機能評価機構認定施設 (一般病院 Ver.5.0)

- 総合周産期母子医療センター (NICU・MFICU)
- 福岡県救命救急センター
- 地域医療支援病院
- がん診療連携拠点病院
- 福岡県救急告示病院
- 福岡県地域災害拠点病院

- 福岡県エイズ治療拠点病院
- 日韓医療技術協力指定病院
- 自動車事故対策機構療護施設
- ISO 9001 認証施設
- ISO 15189 認定施設
- 福岡県肝疾患専門医療機関

※本ニュースレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力をいただいています。